

地上の星(72)

ゴスペルホール「聖書を読む会」

特別企画(79)

2つのJ (Jesus & Japan) を愛した日本人

内村鑑三物語 (2)

(1861年3月23日 - 1930年3月28日)



「不敬事件」によって全国にその名を知られたことは、かえって日本人クリスチャンに奮起を促し、国家主義に向かう日本にブレーキをかける力となった。また、名著『基督信徒の慰め』『求安録』に見られるように、内村の信仰はかつてないほどに深みを増すこととなった。そんな折しも箱根で行われた講演、「後世への最大遺物」は日本の多くの青年に計り知れない影響を与え、今日までも読みつがれている。

経済的にはどん底の生活を余儀なくされ、餓死すら覚悟したほどであったが、英文の自伝、『余はいかにして基督信徒となりしか』(How I Became a Christian)が、欧州でベストセラーになり、その印税で危機を免れる、という一幕もあった。

言論界においても頭角を表し、「万朝報」英文主筆として、また「東京独立雑誌」を創刊して、鋭い時事批評を繰り広げた。当時、大問題となりつつあった足尾銅山の鉍毒事件においては、科学者としての冷徹な観察をもとに、公平な判断をくださった。また、日清戦争義戦論を唱え、朝鮮の自由と解放を主張した。

しかし、次第に、社会を変えた後に聖書を伝えることの限界に直面し、日露戦争に際しては非戦論を唱え、「聖書の研究」誌を創刊して、聖書中心主義に転ずることになった。この時代こそ、内村らしさが最も輝いたときではないだろうか。

一方、親友の新渡戸稲造は、自分に教えを乞う一高生たちを内村に紹介したため、前途有望な青年たちに内村が聖書を教えることとなり、その門下から出た数多くの優秀な弟子たちが日本に恒久的な影響を与えることになった。

その後、愛娘ルツ子の思いがけない死、関東大震災などを経験する中、古くからのアメリカの友人、D・ベルを通して再臨信仰に目覚める。中田重治や木村清松とともに全国で繰り広げた講演会は、日本のキリスト教史にとって画期的な出来事となった。

晩年の内村は、かつて自分を攻撃した人々が憐れむべき結末に至ったのを知って悲しむ。神は確かに、ご自身を頼みとするものに恥を与えられないことを知るのであった。

今回は、日清、日露、関東大震災など、激動の時代を通った内村の後半生をたどります。

記

1. 日時 : 2018年11月9日(金) 10:30 AMより
2. 場所 : ゴスペルホール(電話 026-295-6705)
3. 講師 : 尾崎富雄(ゴスペルホール代表)